

中国ゼロコロナ政策による集中隔離 —内モンゴルへ—

ウニバト

キーワード：コロナ禍、内モンゴル、フィールドワーク、牧畜民

はじめに

筆者はコロナ禍の2021年1月26日から2021年3月24日までの58日間、フィールド調査のため中国に渡航した(表1)。調査地は中国内蒙古自治区(以下、内モンゴル)シリントグ盟ソンドフ旗で、筆者の故郷でもあり、経由地であるフフホト市には家族が住んでいる(図1)。そのため、2年ぶりに家族と会い、モンゴル語でツッガーン・サルと言われる旧正月¹と一緒に過ごすことも今回の渡航の目的の一つであった。

筆者が日本から中国に入国した2021年1月26日は、日本では2度目の新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言を発出していた時期である。実施期間は2021年1月8日から3月21日までであった。具体的な対策は飲食店の営業時間の短縮、在宅勤務の徹底、マスク着用の要請である。入国水際対策は、72時間以内の検査証明の提出を求めるとともに、入国時の検査を実施する。入国後14日間の自宅待機の要求と公共交通機関の利用禁止などである。

2021年1月26日の中国国家衛生健康委員会ホームページ²によれば、国内における新型コロナウイルス感染症(COVID-19、以下新型コロナ)感染者は82例で、中国国外から入った感染者はわずか13例であった。にもかかわらず、中国国内におけるポータルサイト搜狐新聞³などでは、新型コロナ感染例のすべてが中国国外から持ち込まれているように報道されていた。そのためか、中国は外国から入国した人に対して72時間以内のPCR検査⁴の陰性証明と抗体検査結果の提出、飛行機から降り

¹ 旧正月とは旧暦の正月のことを指す。

² 中国国家衛生健康委員会(中国国家卫生健康委员会)「新型コロナ1月25日24時での最新情報(截至1月25日24时新型冠状病毒肺炎疫情最新情况)」2021年1月26日
<http://www.nhc.gov.cn/xcs/yqtb/202101/c968fc85905741ad86cc2917b10b57d9.shtml> 2022年12月28日閲覧。

³ 搜狐新聞「今回の感染拡大は輸入感染症例によるもので、さらに感染拡大の可能性がある(此轮疫情系新的境外输入引起、波及范围或再扩大)」2021年10月24日
https://www.sohu.com/a/496945792_161795?scm=1101.topic:37174:110019.0.0.0&spm=smpc.topic_205.tpl-pc-top-feed.1.16720413755389SwBCF8_37174 2022年12月28日閲覧。

⁴ PCR検査の正式名称は「ポリメラーゼ連鎖反応」である。英語ではPolymerase Chain Reactionと表記される。(神奈川県衛生研究所サイト
https://www.pref.kanagawa.jp/sys/eiken/002_kensa/02_gene/200626_pcr.html 2022年10月17日閲覧)。

た日から 14 日間ホテルで隔離するという水際対策を行っていた。

本稿では、筆者が経験した 2021 年前半における中国の新型コロナ水際対策の実態を報告する。具体的には渡航準備、日本から経由地の西安市までの移動と隔離生活、フフホト市でのホテルと自宅での隔離生活、調査地スニド左旗の状況である。スニド左旗の牧畜地域は厳しい検疫体制をとる中国大都市とは異なり、人びとは散在して暮らしているためか、2021 年調査時には新型コロナ感染症例は無く、コロナ禍の影響を強く受けているような状況ではなかった。しかしながら、2022 年よりオミクロン株が猛威を振るうようになると、6 月に調査地スニド左旗でも新型コロナ感染者が報告され、厳しいロックダウンが敷かれるようになり、牧畜民の生活は一転して厳しさを増すようになっている。この状況についてもオンラインによる聞き取りにもとづき報告する。

表 1 筆者の中国渡航日程 2021 年 1 月 26 日～2021 年 3 月 24 日 (58 日間)

月日	滞在地	内容
1 月 26 日	自宅 (千葉) → 成田空港 → (航路) → 西安市空港 → 隔離ホテル (西安: 維也納ホテル)	移動 西安市空港に 17 時 50 分着 夜 23 時 30 分頃に隔離ホテルの部屋に入室
1 月 27 日～2 月 9 日 (14 日間)	隔離ホテル (西安)	隔離 PCR 検査 3 回
2 月 10 日	隔離ホテル → 西安市空港 → (航路) → フフホト空港 → 隔離ホテル (フフホト: 祥泰ホテル)	隔離終了、移動 午前 11 時頃に隔離ホテルの部屋に入室
～2 月 17 日 (7 日間)	隔離ホテル (フフホト)	隔離 旧正月 PCR 検査 2 回
2 月 17 日	隔離ホテル → 自宅 (フフホト)	隔離終了、移動 夜 24 時に隔離終了、24 時過ぎに自宅へ
2 月 18 日～3 月 3 日 (14 日間)	自宅 (フフホト)	自宅待機 毎日社区 ⁵ へ体温と健康を報告 市内の移動と外食は可
3 月 4 日	自宅 (フフホト) → (陸路) → スニド左旗	自宅待機終了、移動
3 月 5 日～3 月 18 日 (14 日間)	フィールド調査	
3 月 19 日	スニド左旗 → (陸路) → フフホト	移動
3 月 20 日～23 日 (3 日間)	自宅 (フフホト)	PCR 検査
3 月 24 日	自宅 (フフホト) → フフホト空港 → (航路) → 広州空港 → (航路) → 成田空港 → 自宅 (千葉)	移動

⁵ 社区とは、中国の都市内にある医療や公衆衛生を担う基層組織であり、幹部は住民の選挙によって選ばれることになっている (雨森 2021)。

1. 中国渡航の事前準備：チケットと検査予約

チケットの手配は出発予定である 2021 年 1 月の 3 ヶ月前の 2020 年 10 月から始めた。

コロナ禍のため、海外から中国へ渡航する場合は中国駐日本大使館が指定する航空会社を利用しなければならなくなっていた。そのためもあり、便数はコロナ禍以前より大幅に減っていた。だが、中国を渡航する人が少なくないためであろう、チケット代は一番安いのも以前筆者が渡航した 2019 年 3 月より 5 倍以上に値上がりしていた。

中国への渡航条件は渡航前 72 時間以内の PCR 検査陰性証明と IgM 抗体⁶検査証明である。しかも、検査機関は中国駐日本大使館が指定する機関でなければならなかった。

両検査の費用は個人予約の場合約 3、4 万円かかる。ただ、団体検査というのがあり、複数で申し込むと 2 万 5000 円で、個人予約より 5000 円から 1 万 5000 円安い。そこで、友人の紹介で団体検査の予約をした。予約はすべて WeChat という中国版 LINE で行なった。病院への連絡担当者により予約予定者の WeChat グループが作られ、招待人数が 100 人になると団体予約ができるという。PCR 検査と抗体検査結果は陰性であった。

陰性証明を得たうえで、次に渡航用の「健康コード」を取得する。健康コードとは、PCR 検査陰性証明を用いてオンラインで申請する QR コードである。スマホでは WeChat を通じて申請する。PC でも申請可能である。申請には PCR 陰性証明に加えて、中国における最終到着目的地の住所と電話番号、出発前の 14 日間それまでいたところの滞在地を登録する必要がある。

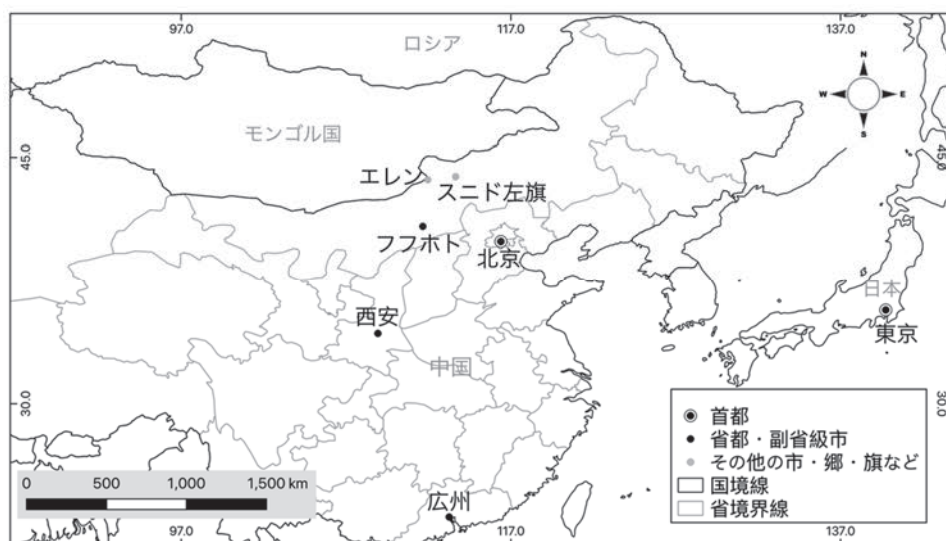


図1 訪問滞在都市位置図（筆者作成）

⁶ IgM 抗体は細菌に感染した時に最初に作られる抗体である。（東京ビジネスクリニックサイト <https://www.businessclinic.tokyo/archives/2885> 2020 年 10 月 17 日閲覧）。

2. 中国へ入国：経由地西安へ

筆者は 2021 年 1 月 26 日に成田空港から西安へ飛行機で向かった。筆者が乗った飛行機は乗客定員 150 人前後のボーイング 737 便で機内の乗客席は間隔を空けずに座っており、乗客はおおよそ 120 人から 130 人であった。乗客の中にはマスクはもちろんのこと、白い防護服を着て、防護メガネをかけている人が数十人くらいいた。

成田空港を 13 時 55 分に出発し、西安空港に着いたのは 17 時 50 分だった（図 1）。乗客は 4 つのグループに分けられ、飛行機から降りた。成田空港でのスタッフは誰一人防護服を着ていなかったが、西安空港のスタッフは全員マスク、防護メガネを着用し、防護服を着ていた。空港は消毒が徹底されていて、空港全ての人たちが防護服を着ている様子を見てかなり緊張した。

入国審査が終ると、PCR 検査と抗体検査を受けた。検査結果が出るまで約 2 時間かかった。この間に健康管理アプリの登録を行った。これはスマホで QR コードを読み込んで新しく健康コードを申請するというものである。健康コードは各省、自治区ごとに設定されており、西安市内で使うものであった。アプリ登録するために、空港内は無料 Wi-Fi が完備されていた。外国から入国した乗客は他の乗客者との接触しないようになっており、臨時出口が設置されていた。

夜 21 時頃に空港でのすべての入国手続きが終わり、隔離ホテルへの移動用の大型バスに乗った。バスでは席を空けて座るように指示された。移動中、バスの窓から外を眺めていると、夜の西安市中心部のビル群は濃い煙霧に包まれており、大気汚染が深刻であった。また、西安市の夜の気温は 0 度近くで、千葉よりかなり寒く感じた。道中、隔離ホテルがどこになるのか事前に伝えられなかったもので、隔離ホテル代が安いかどうか、部屋が清潔かどうかを心配していた。

1 時間くらい市内を走り、22 時頃によく隔離ホテルに着いた。隔離ホテル名は西安市蓮湖区にある維也納ホテルである。隔離ホテルに入る前に、すべての人と荷物全体に消毒液を吹きかける徹底した消毒が行われた。チェックインなどを済まし、部屋に入室したときには 23 時 30 分を過ぎていた。飛行機から降りた時からホテルの部屋に入室するまで約 6 時間かかっていた。

3. 西安でのホテル隔離生活

3. 1. 隔離生活と費用

西安でのホテル隔離期間は 14 日間で、その間ホテルの部屋から一步も出ることができなかった。ホテルの部屋掃除、洗濯サービスなども停止されていた。ホテルの部屋のドアを開けることができたのは、毎日 3 回の食事を受け取る時と PCR 検査の時だけであった。

隔離期間中の朝昼晩の 3 食はホテルが提供するもののみで、外部からの購入は認められていなかった。食事はホテルのスタッフが運んでくれた。各部屋のドアの隣に椅子が置かれてあり、お弁当を椅子の上に置いてくれる。置いた後スタッフはドアをノックする。3 食の時間は、朝食は 8 時頃、昼食

は 12 時頃、夕食は 18 時頃である。

PCR 検査は隔離中 3 回受けた。入居から 3 日目、7 日目と 13 日目である。PCR 検査は医療関係者の人が部屋に入って来て行った。

食べ物以外の生活必要品はネットで注文可能だった。洗剤などを注文した。

隔離ホテルに滞在中は時間に余裕があると思っていたため、出発前は研究に関連する論文と数冊の本を持ってきた。隔離ホテルの部屋の広さは 1 人滞在するには十分であったが、昼間でも電気なしでは生活できないぐらいの日当たりの悪い部屋だった。別の部屋を変更してもらいたいと申し出たが、空いている部屋はないという理由で断られた。太陽が見えない日々は辛かった。また、長時間部屋に滞在すると、夜間十分な睡眠をとっているにも関わらず、日中でも眠気に襲われ、眠ると丸一日でも眠り続けられてしまうような症状が見られた。研究論文の執筆にはあまり集中できなかったため、研究課題が予定通り進められなかった。本を読んで、メモをするぐらいが精一杯だった。

他方で、よかったのはネット環境状況である。筆者はホテルで日本の大学院のゼミを無事に受けることができた。

ホテル代、食事代と PCR 検査費用はすべて自己負担であった。ホテル代は 1 泊 328 元⁷、食事代は 1 日 100 円で、合わせて 1 日 428 元、計 5992 元である。PCR 検査費用は 1 回 160 円で、計 480 元であった。費用はチェックインする時にまとめて支払った。

隔離ホテル入室時に、WeChat に当日入居者のグループが作られ、PCR 検査の実施時間などが通知された。同グループ内では、入居者同士で隔離ホテル費用に関して議論され、コロナ禍以前の 2019 年と比べて約 2 倍になっていることなど不満の声も聞こえた。

西安空港で申請した健康コードの個人情報が新型コロナ対策関連機関で共有されているようで、西安市に着いた翌日に次の目的地であるフフホト市とスニド左旗の新型コロナ対策機関から電話がかかって来た。「ホテル隔離などの疾病予防対策をしっかりと守ってほしい」という内容であった。

3. 2. 隔離ホテル提供の食事

西安市は中国の陝西省の省都であり、古くは中国古代の諸王朝の都となった長安である。西安の料理は中国で「陝西美食」と呼ばれるくらい有名で、特に麺類が人気である。西安のロックバンドの曲⁸でも歌われているくらいだ。到着前、筆者は「陝西美食」を期待していたが、少々期待外れだった。

以下、実際に提供されたある一日の食事を紹介したい（写真 1, 2, 3）。

この日の朝食は巻き饅頭、揚げパン、ゆで卵、ヤムイモ、粟粥であった（写真 1）。昼食の主食は焼きそば、おかずはニンニクの芽・豚肉炒めとナス炒めである（写真 2）。夕食の主食は野菜春雨と焙子

⁷ 2021 年 1 月末の時点で 1 元＝16.29 円である。以下すべてをこのレートで計算する。

⁸ 例えば、黒撒ロックバンドの「陝西美食」という曲がある。

9、おかずはキュウリ・木耳・豚肉炒めと漬物である（写真3）。写真1、2、3は全て2021年1月28日に撮影したものである。



写真1 西安での隔離ホテルの朝食



写真2 西安での隔離ホテルの昼食
右上が「陝西青棗」



写真3 西安での隔離ホテルの夕食

西安におけるホテル提供の料理の特徴としては主食に麺類が多かった。おかずの肉と野菜炒めの肉は主に豚肉だった。また、「陝西青棗」という果物をたくさん配布してくれた（写真2）。

品数は豊富で、量的にも内容的にも満足できるものであった。一方で、隔離ホテルの料理に異物が入っていたことが多数起こっており、隔離者たちの WeChat グループの中で、異物混入による健康問題についてかなり激しく議論されていた。筆者の食事の中にも異物が入っていたことが数回あり、ホテルの管理人に報告した。そうこうしていると、公安の人が料理の衛生問題を SNS にあげたり、外部からの購入を求めたり、苦情を言った隔離者たちに「あなたの行動は好ましくないと警告しに来た」という報告が隔離者の WeChat グループの中で流れた。その後、ホテルは少し対応してくれたが、完全な改善には至らなかった。

3. 3. 刻一刻と変わる新型コロナ対策

入国地で14日間ホテルに隔離されてから次の目的地に着いた後、再び7日間ホテルで隔離される場合もあれば、自宅待機になるかは地域によって異なっていた。そのため、西安での隔離を終え、フフホトに移動したあと、またホテルで7日間隔離されると、フフホトの隔離ホテルで旧正月を過ごす

⁹ 焙子とは、小麦で作られた焼いた餅である。味により塩、砂糖、白ごま味などに分けられている。

ことになってしまう。そのため、大変心配していた。だが、フフホト市の公式ホームページや SNS などどこにも情報はなかった。フフホトの自宅の所属賽罕区社区に何回も電話して確認したが、明確な答えはなかった。筆者より 1 ヶ月前に甘肅省入りしたスルナ（本特集のスルナ報告）は経由地である入国地で 14 日間ホテルに隔離された後、さらに最終目的地でも 7 日間の自宅待機を求められていた。

特に連絡もないので、西安での隔離期間中、久しぶりに家族と一緒に旧正月を過ごせるだろうと楽しみにしていた。ところが、西安での隔離が解除される 2 日前の 2 月 8 日にフフホト市の賽罕区社区責任者から電話がかかってきて「旧正月で新型コロナ対策が厳しくなってきたため、フフホトに着いた後また 7 日間ホテルで隔離することになった」と告げられ、大変失望した。

4. フフホトへ

フフホトでのさらなる 7 日間のホテル隔離を告げられてから 2 日後、西安での隔離期間がようやく終わった。ただし、外国から入国した人に対する制限として、スマホの健康コードの有効期間制限がある。14 日間の隔離終了後の有効期間は 24 時間であるため、次の目的地まで必ず 24 時間以内に移動する必要がある。移動できない場合は西安でさらに 14 日間隔離されるという。また、24 時間以内の PCR 陰性証明も求められていた。そのため、出発前日の PCR 検査で陰性証明を取得していた。

2 月 10 日に西安ホテルでの隔離が終わり、当日の午前中に飛行機に乗ってフフホトに向かった（図 1）。隔離施設から西安空港への移動は数人で、西安疾病予防管理センターが空港までの小型バスを手配した。

西安からフフホトまでの国内線の機内では、隔離の必要がない人はマスクを着けるだけで席を空けずに座っていた。筆者のように隔離をへている外国からの入国者は 1 人だったため、最後尾の席に座るように指示された。

フフホトに着いた後は、飛行機から筆者を先頭にして降りるように指示された。これ以外は、空港出口までは他の隔離不要者と同様に進んだ。空港など公共の場ではマスクの着用が義務化され、空港の入口などで体温のチェックを行っていた。出口を出る際に、隔離必要者である筆者のみ看護室に案内され、証明書類の確認と健康管理アプリの登録などが行われた。

フフホトでの隔離ホテルへの移動は 1 人だったためか、なんと迎えに来たのは救急車であった。

4. 1. 隔離生活と費用

フフホトでも、隔離期間中はホテルの部屋から一切出ることができず、ホテルの部屋の掃除、洗濯サービスなども停止され、部屋のドアを開けることができるのは、食事の弁当を受け取る時と、PCR 検査をする時だけであった。PCR 検査は入室日と最終日の 2 回受けた。フフホト市でも 3 食すべて

ホテルが提供するもので、外部からの購入は認められなかった。

フフホトのホテルの部屋は日当たりの良い部屋だった。ネット環境もよくて、西安のホテルよりはだいぶ楽だった。

フフホトでの隔離費用は西安とほぼ同額で、ホテル代は西安より1元高い1泊329元、食事代は西安と同じ1日3食100円で、合わせて1日429元である。PCR検査費用は安くなり、1回80円で受けられるようになった。計2回で160元であった。フフホトでの隔離ホテルにかかる費用は全部で3003元であった。

4. 2. 隔離ホテル提供の食事

フフホト市は内モンゴル自治区首府で、漢族、モンゴル族、ウイグル人、回族の人たちが居住している。回族のことをモンゴル語でホトンという。料理は中国北方系に属し、モンゴル料理とイスラム料理¹⁰が人気である。

以下は、フフホトで実際に提供された隔離ホテルの食事である（写真4、5、6）。

この日の朝食は焼売とモンゴル語でスーテーツァイと言われるモンゴル風塩いりミルクティーである（写真4）。昼食の主食は赤飯と饅頭、おかずは羊肉・インゲン豆の煮込み、ほうれん草・カボチャの煮込みである（写真5）。夕食の主食は米と巻き饅頭、おかずは牛肉・人参炒め、ジャガイモの煮物、焼き鶏肉、漬物である（写真6）。写真4、5、6は全て2021年2月12日に撮影したものである。



写真4 フフホトでの隔離ホテルの朝食 写真5 フフホトでの隔離ホテルの昼食



写真6 フフホトでの隔離ホテルの夕食

¹⁰ ウイグル人や回族の人びとが作っている料理である。

朝食と昼食にはりんごやバナナが必ずついた（写真 4, 5）。

フフホトの隔離ホテルで提供された料理の特徴は主食が饅頭と米であることであった。おかずは主に羊肉と牛肉で、煮物と炒め物が主だった。また、朝食にミルクティーも出されている。フフホトでの 3 食は品数豊富で、量的にも内容的にも満足できるものであった。内モンゴル出身であるため、フフホトのホテルの料理が好みに合い、故郷に帰った感じがした。

4. 3. ホテルで迎える旧正月

筆者がフフホトに着いた日は旧正月の 2 日間前である。今回の渡航目的の一つは家族と一緒にツァーガン・サルを過ごすことであったが、フフホト市賽罕区の感染対策が旧正月の直前に変更され、フフホトに着いたあとまた 7 日間ホテル隔離されることになったのは先述したとおりである。

モンゴル人はツァーガン・サルをご家族と一緒に過ごすことを大事にする。また親戚知人を互いに訪問しあい、年賀のあいさつを交わし、食事を共にするのがモンゴルのツァーガン・サルの慣習である。

結局、筆者はフフホトに帰って来たのにホテルで一人ツァーガン・サルを過ごすことになり、日本にいるように、家族とビデオ通話でツァーガン・サルの挨拶をした。ホテルの中で一人年越しをするというのは人生はじめての経験であった。そのとき強く孤独を感じた。日本にいるときは一人で年越しをしていたが、それとは異なる感じであった。また、コロナ禍でツァーガン・サルの過ごし方も変わりつつある。2021 年、予定していた親族に会えなくなったことや、宴会などがコロナ禍以前よりかなり少なくなったという。

4. 4. フフホト市での自宅待機 2 週間

2 月 17 日、ようやくフフホトの自宅に戻ることができた。さらに 2 週間の自宅待機が必要であった。そのうえ、毎日社区へ体温と健康報告が義務付けられていた。とはいえ、市内の移動と外食は可能であった。

5. スニド左旗のコロナ禍と牧畜民

5. 1. フィールド調査：スニド左旗へ

14 日間の自宅待機期間が終わるとすぐに、調査地であるスニド左旗に向かった（図 1）。結局、スニド左旗に調査に入ることができたのは入国から 35 日後の 2021 年 3 月 4 日であった（表 1）。

スニド左旗に向かうにあたり、新しく健康コードの申請と PCR 検査は必要なかった。途中では新型コロナウイルスに関するいかなる制限もなかった。健康コードを確認されることもなかった。

フフホト市からスニド左旗までの距離は 430km であるため、移動手段は一般的に大型バスである。しかし、大型バスの場合は、移動に 7 時間ほどかかるため、乗り合いタクシーを利用することが少ない。乗り合いタクシーの場合にスニド左旗まで所要時間は 5 時間ほどでバスより 2 時間早い。ただし、費用は大型バスより 30 元高い。

筆者は WeChat で乗り合いタクシーを手配し、午前 10 時頃にスニド左旗に向けて出発した。フフホト市から 2 時間ほど走ると草原地帯に入った。車の窓から見える風景は黄色の草原で、山の北側や谷では、融けずに残っている積雪があり、初春の草原だった。気温は約 10 度であった。

スニド左旗政府中心地にある屋内の市場では、マスク着用が義務化されていた。屋外ではマスクを着用していない方もたくさんいた。

5. 2. コロナ禍の牧畜民への影響

筆者の調査方法は主に被調査者の家庭に訪問して聞き取りを行うものである。また牧畜民の家に数日間住み込みしながら調査を行う場合もある。調査内容は主に牧畜民の土地分配による定住化過程と定住化に伴った水問題についてである。

聞き取りにおいて、筆者はどのような対応をとらえるのか心配していた。しかし、牧畜民の家を訪問する時、この地域ではこれまで感染者が確認されていなかったためか、政府の徹底した感染対策への信頼からか、筆者への警戒心をほとんど感じなかった。

調査対象者の牧畜民は現在、ウシの販売により現金収入を得ている。そのため、コロナ禍で、ウシ価格の下落と越冬用の干し草と飼料価格の値上がりを心配する声が聞かれた。実際、子牛の平均取引価格はコロナ禍以前の同月に比べ約 3 割下がっていた。小家畜とウマの価格はあまり変化がなかった。

家畜の取引は、主に自宅から約 50km 離れた家畜マーケットで行われている。そこでは、ウシやウマ、ラクダなどの主に大型家畜が取引されており、牧畜民の協同組合が開設している。ここでは、家畜を売りたい人と買いたい人が集まり、せりや入札による公正な価格で家畜取引が行われている。家畜マーケットには、中国の都市部で高まる食肉需要を満たすために毎日数多くのトラックがやってきて、ウシやウマ、ラクダなどを満載して都市に戻っていく。しかし、新型コロナ対策による道路封鎖や検疫によりトラックが来られないことが少なくなく、トラック数はコロナ禍以前よりかなり少なくなっているとのことだった。さらに、2020 年に家畜マーケットがある地域でまだ感染者が出ていないにもかかわらず、人が集まるのは好ましくないとされ、1 年間に 6 月から 12 月間の 6 ヶ月ぐらい開催する家畜マーケットの開催期間が 8 月のみの 1 ヶ月に短縮されたという。牧畜民のウシを売却する理想な時間は 10 月と 11 月である。理由はウシを高い値段で売れるためである。2020 年には販売時期が合わないことや価格が低いことにより、全くウシを売られなかった牧畜民もいたという。ア

フリカのケニアの牧畜民は家畜マーケットが閉鎖された場合も、さまざまな方法を使って自由に家畜を販売していることが報告されている（内藤 2021:54）。しかし、中国では、新型コロナ対策でロックダウンされる場合は、家畜マーケットは完全に閉鎖され、牧畜民自身も居住地からまったく出られなくなり、ウシの販売が全くできなくなることも想定された。とはいえ、そこまで人びとは深刻にとらえていなかった。

コロナ禍は世界各地、特に人口密度が高い大都市において国の社会や経済に極めて大きな影響を与えた。しかしながら、2021 年 3 月時点では、人口密度は極めて低い牧畜地域の社会と文化に対してその根底を揺るがすような影響をもたらしているとはいえないと感じた。

3 月 19 日に 14 日間のフィールド調査を終えて、フフホトへ戻った。

6. 日本へ帰国

6. 1. 日本の水際対策

日本への入国手続きは中国の水際対策と比較すると楽であった。まず、飛行機搭乗条件は 72 時間以内の英語もしくは日本語翻訳付きの PCR 陰性証明だけである。検査機関に特に指定はなかった。自宅近くの病院に英語翻訳付きの PCR 陰性証明を作成できるのかを電話で確認し、そこで出発前日の 3 月 23 日に検査を受けた。検査結果は陰性だった。PCR 検査を午前に受けて、陰性証明を当日の 16 時頃に受け取ることができた。

6. 2. 入国審査

日本への帰国ルートは航路で、フフホト発、広州経由、成田空港着である（表 1）。フフホトでも広州の空港でも相変わらずスタッフは防護服と防疫メガネをつけていた。

日本に入国するとき、成田空港で抗原検査を受けた。日本の航空会社のスタッフは普通の服を着ており、マスクのみで、防護服も防護メガネもつけていなかった。入国時にスマホアプリのインストールが義務付けられており、そのアプリについて丁寧に説明したり案内したりしていた。入国した私たちへの警戒心はほとんど感じられなかった。

入国日の翌日から 14 日間の自宅待機が定められていた。スマホアプリの利用目的は自宅待機中の位置情報の記録、ビデオ撮影、健康状況の報告などである。

また、空港から自宅まで公共手段での移動も禁じられていた。そのため、成田空港から自宅まではタクシーで移動した。この費用は 1 万 5600 円であった。

6. 3. 日本での自宅待機

14 日間の自宅待機期間中のルールは他者と接触しないことである。毎日、ビデオ撮影による位置

情報と健康状況をオンラインで報告する。

必要に応じてスーパーでの買い物は可能であった。外食は禁止されていた。

大学からも健康状況のメール報告が毎日求められた。また、14 日以内は大学構内へは立入禁止だった。

7. 費用

フィールド調査にかかった費用の総額は 38 万 1557 円であった。まず、航空券代 19 万 6997 円、西安とフフホトでの 21 日間の隔離ホテルと食事代 14 万 6528 円、PCR など検査費用 3 万 8032 円である。PCR 等検査の内訳は中国渡航前の PCR 検査と抗体検査費用 2 万 5000 円、ホテル隔離中の 5 回の PCR 検査費 1 万 426 円、帰日渡航 PCR 検査費 2606 円である。

新型コロナ発生以前の 2019 年 3 月に筆者が内モンゴルでおこなったフィールド調査での航空券代はわずか 5 万円だった。もちろん、隔離ホテル代も PCR 検査代もない。今回のフィールド調査では、チケット代は 4 倍の約 20 万円にもなり、隔離ホテル代なども加えると、通常より 33 万円も多くかかった。それにもかかわらず、全日程 58 日間、日本での自宅待機期間も含めると、72 日間のうち、フィールド調査に費やせたのはわずか 14 日のみであった。この上、約 2 ヶ月半にもわたる海外渡航と自宅待機は日本での家賃の負担、アルバイトの継続困難などもあり、非常に経済的な負担の多いものであった。

8. 2022 年における新型コロナ感染の拡大

2021 年 11 月 8 日に南アフリカで最初のオミクロン株による感染例が報告されて以降、2021 年 12 月に日本でも感染例が報告された。オミクロン株は高い感染力を持っており、2022 年 9 月末まで日本での感染数は 316 万 8145 人にものぼった¹¹。

筆者は 2021 年のフィールド調査から人口密度が低い牧畜地域では、新型コロナは拡大しないと考えていた。しかし、オミクロン株はそうではなかった。2022 年 5 月 31 日に調査地のスンド旗で最初の新型コロナ感染者が発表された。6 月 2 日にスンド左旗全地域の封鎖が発表された¹²。旗内外を結ぶ高速道路は封鎖され、旗内でも旗の下位行政区分であるガチャ¹³の境界で 2022 年 6 月 2 日から厳しい検問が行われ「必要のない外出は控えるよう」とされた。

¹¹厚生労働省「国内の発生状況」

https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/kokunainohasseijoukyou.html#h2_1 2022 年 10 月 9 日閲覧。

¹² スンド左旗人民政府「スンド左旗の新型コロナ予防管理センターが感染予防に関する会議を開催（苏尼特左旗新冠肺炎疫情防控指挥部召开疫情防控部署会议）」2022 年 6 月 2 日

<http://www.sntzqdwgkw.gov.cn/news/show-13790.html> 2022 年 10 月 9 日閲覧。

¹³ ガチャとは、中国内モンゴル自治区の行政区画単位で、村にあたる。

感染源はスノド左旗に隣接するエレン（二連）市と言われていた（図 1）。エレン市は鉄路と陸路のモンゴル国との国境をもつ都市である。旗内で感染者がまず確認されたのはエレン市と接続するバインホンゴル（巴音洪高爾）ガチャである。しかし、エレン市からスノド左旗への具体的な感染経路は不明であった。

2022 年 5 月 31 日にバインホンゴル・ガチャ内で感染者数例が確認されると、旗政府は当該ガチャで、家畜の世話をする人 1 人を残して、ほか全員を旗人民政府所在地かエレン市にあるホテルに 14 日間隔離させた。

新型コロナ感染拡大と同時にやってきたのは干ばつである。バインホンゴル・ガチャのガチャ長によると、2022 年にスノド左旗では 6 月 27 日まで雨がほとんど降らなかったという。ガチャの牧畜民は 2021 年に購入した干草と飼料を与えながらなんとかしのいでいた。ところが、ロックダウンされ、隔離がおこなわれてしまったため、新しく干し草と飼料を購入することができなくなってしまった。この間に、干草と飼料がなくなってしまった世帯もあった。地元の牧畜民は「新型コロナ対策で道路が封鎖されているため、家畜の飼料が手に入らなくなっていることを重視してほしい」と WeChat グループやモーメンツ¹⁴を通じて呼び掛けていた。

新型コロナ感染者はスノド左旗でわずか数例しか確認されていなかった。それにもかかわらず、これほど厳格な対策がとられていた。そのため、これほどまでに行動が制限されなければならないのか、という批判や疑問の声が SNS などで広く拡散された。

バインホンゴル・ガチャの牧畜民の隔離期間は 14 日間で、感染が確認されたなかった人たちは 6 月 12 日に各自の家に帰ることができた。濃厚接触者は 6 月 18 日まで隔離されたという。

スノド左旗で 6 月 13 日から 15 日にかけて連続 3 日間、全地域で PCR 検査が行われた¹⁵。牧畜民の PCR 検査を受ける場所はソム¹⁶中心地である。6 月 16 日に公開されたこれまでの感染例は 25 人であった¹⁷。そのあと、感染は収まり、6 月 26 日から通常に戻った¹⁸。

¹⁴ モーメンツとは、ウェブ上に一般公開するものではなく、友人・知人との間だけでアルバムを共有することである。中国語で朋友圈と言う。

¹⁵ スノド左旗政府 WeChat 公式アカウント「スノド左旗新型コロナ感染地区 PCR 検査に関するお知らせ第 7 号（关于开展苏尼特左旗新型冠状病毒区域核酸检测的通告第 7 号）」2022 年 6 月 12 日 https://mp.weixin.qq.com/s?__biz=MzA5OTM0NDkxNA==&mid=2650248589&idx=1&sn=59905b5881f98a1f3b1b1ca915a22e7f&chksm=888082f0bff70be611e98f6de2b042dfd4c9e8ca81405c0359cfa84c9948f0692a57e3515ede&scene=27 2022 年 12 月 28 日閲覧。

¹⁶ ソムとは、中国内モンゴル自治区の行政区画単位で、いくつかのガチャに構成される郷にあたる。

¹⁷ 新華社「内モンゴルスノド左旗で陽性感染者 25 人が確認（内蒙古苏尼特左旗现有阳性感染者 25 例）」2022 年 6 月 16 日 https://m.gmw.cn/2022-06/16/content_1303000586.htm 2022 年 12 月 28 日閲覧。

¹⁸ 内モンゴル自治区人民政府「シリンゴル盟スノド左旗新型コロナ予防管理センターのお知らせ第 21 号（锡林郭勒盟苏尼特左旗新冠肺炎疫情防控工作指挥部通告第 21 号）」2022 年 6 月 27 日 https://www.nmg.gov.cn/ztzl/qlfkxxgzbdfynmgzxd/msfkgz/202206/t20220627_2077386.html 2022 年 12 月 28 日閲覧。

おわりに

今回のフィールド調査期間はホテルでの隔離、自宅待機、フィールドワーク調査期間を含めて 58 日、日本での自宅待機を加えると 72 日間である。そのうち、ホテル隔離期間は 21 日間、内モンゴルでの自宅待機 14 日間、日本における自宅待機期間は 14 日である。その一方で実際の調査は 14 日にすぎなかった。経済的な負担も大きかった。また、中国では、感染拡大に相当の注意が払われており、いつなるとき交通が封鎖されるかわからない状態にあった。筆者は調査に出る前に家族と旧正月を一緒に過ごす予定であったが、フフホト市内における急な対策変更によりホテルで過ごすほかなかった。フィールド調査に出る場合にも、調査中にロックダウンで調査地に入れなくなる、もしくは出れなくなる、といった不測の事態も想定した調査計画を立てる必要があると思われた。

とはいえ、コロナ禍における内モンゴルでのフィールドワーク調査経験は、筆者にとってたいへん得難いものであったのは事実である。中国のホテルに 2 週間も缶詰にされることは初めての体験で、今後もないだろう。とりわけ、ホテルの食事から西安とフフホトの違いを垣間見ることができたのはよい経験だった。牧畜地域でのコロナ禍の実際の様子など、SNS による聞き取りでは感じるができないことであった。当時現地では感染への恐怖よりはウシの価格下落と飼料価格の値上がりという経済的な問題に直面していた。

2022 年には牧畜民の中でも新型コロナ感染者が確認された。牧畜民の隔離と道路の封鎖対策を行ったことに加え、干ばつが発生したことにより飼料が底をつくという深刻な事態が発生していた。

中国の新型コロナ対策は、ヨーロッパ諸国、アメリカ、日本といった国々とは大きな異なっており、中国国内においても地域によって差異が見られた。各国の対策の策定はその国の政治体制に強く左右されるもので、とりわけ中国はその影響が特に大きいと感じた。

謝辞

本フィールド調査は、(財)公益財団法人平和中島財団 2020 年度外国人留学生奨学金(2020 年 4 月～2021 年 3 月)、(財)ロータリー米山記念会 2021～2022 年度奨学金(2021 年 4 月～2023 年 3 月)を受けて実施しました。関係者の皆様に、深く御礼を申し上げます。

引用文献

雨森直也(2021)「新型コロナウイルス流行時におけるペー族住民の危機意識の醸成と後退の要因—

中国雲南省大理ペー族自治州鶴慶県を例とした文化人類学的検討」、『日本福祉大学子ども発達学論集』13、49-57。

内藤直樹(2021)「パンデミックの時間と笑い—未知のものへの想像力に関する比較から」浜田明範・

西真如・近藤祉秋・吉田真理子編『新型コロナウイルス感染症と人類学—パンデミックとともに考

える』水声社、42-63。

(うにばと・千葉大学大学院人文公共学府後期課程)

Forced quarantine under China's Zero-COVID Policy: Heading to Inner Mongolia from Japan

Unibat

The author experienced 58 days from January 26, 2021 to March 24, 2021 during COVID-19 in China with the aim of conducting fieldwork. This study presents the author's experiences in research travel with China's COVID-19 border measures and Zero-COVID policy, including the travel preparation, quarantine life in Xi'an which was the transit point, quarantine life in Hohhot where the author's home located, and the situation of survey site in Sonid Left Banner. Unlike large Chinese cities with strict quarantine regimes, Sonid Left Banner was barely affected by the COVID-19. Since the pastoral areas are sparsely populated places, there were no infected cases of the COVID-19 in 2021. However, due to the rampant spread of COVID-19 virus variant Omicron, cases of infection were reported there since June, 2022. Severe lockdowns by Zero-COVID policy made lives of pastoralists far more difficult. The situation is also presented in this study based on online interviews.